

研究便り No. 52

令和3年度 研究の概要

| | |
|--------------------|-------|
| 発刊にあたって | 1 |
| 研究主題について | 1～2 |
| 研究の目的及び内容 | 2～3 |
| 教科等の研究実践 | 4～8 |
| 共創型探究学習シャトル | 9 |
| 共創型探究学習CAN 語り合いの時間 | 10～11 |
| 特別活動 学校行事 | 12 |
| 令和4年度教育研究発表会のご案内 | 12 |

香川大学教育学部附属坂出中学校 発刊 令和4年2月16日

発刊にあたって

学校長 平 篤志

早春の候、皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

本校では、研究テーマを『わたし』が変わる『ものがたり』の学び』として、教員一同継続的に授業研究に取り組んでいます。ここで言う「ものがたり」とは、社会構成主義に照らしたナラティブ・アプローチに基づくものであり、子どもたちが語り合っていくことで、自分自身の認識が書き換えられ、これからの自己のあり方を新たに形成していく過程を大切にするものです。ナラティブ・アプローチは、近年、教育学をはじめ、社会学や臨床心理学などで幅広く取り入れられています。

本校では、この「ものがたり」がもつ力を授業に活かすことを通じて、学ぶ意味や価値を実感し、生涯にわたって学び続けようとする強い意志をもった生徒を育成することをめざし、さまざまな取組を行ってきました。本年6月に予定している教育研究発表会は、これまでの試みを土台にしてさらに発展させ、語り合い、探究する中で「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムを提案することとしています。また、単元構成、問いの立て方、しかけの工夫、教師と生徒間・生徒同士の対話のあり方、学習後の振り返りなどについても提案したいと考えています。並行して、平成30年度からは、文部科学省研究開発学校の指定を受け、生徒自らが主体的に課題を設定し、解決しようとする異学年合同共創型探究学習（総合学習CAN）の研究開発を進めてきました。今後は、課題の洗い出しをしながら、さらに進化させようと考えています。

本号の研究便りでは、今回の教育研究発表会を念頭において、教科の目標と単元構成、授業における実践と評価のあり方、学習を支える学校環境・学校文化づくりなどの観点から、教科・領域ごとに研究内容を掲載しました。研究途中であるため至らぬ点多々あるかと存じますが、忌憚のないご意見をお聞かせ頂ければ幸いです。

今後とも、変わらぬご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。

研究主題

「わたし」が変わる「ものがたり」の学び

— 語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案 —

1 研究主題について

人工知能（AI）、ビッグデータ、Internet of Things（IoT）、ロボティクス等の先端技術が高度化してあらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代が到来し、今や、知りたい情報は手持ちのスマートフォンで検索すれば、ただちに知ることができるし、受験に必要な知識は、学校だけでなくインターネット上でも教えてくれる。そういった知識や情報をめぐる社会の大きな転換期にあつて、学ぶことの本来の意味や価値が問い直されている。「学びとは何か」「何のために学ぶのか」「なぜ学校という場所で学ぶのか」といった問いに、学校教育が応えなくてはなら

ない時代を迎えているのである。

そもそも「学び」とは何か。本来、「学び」とは、自分をとりまく世界の見方や感じ方を広げたり、深めたりするものであり、それによって自分自身が変わるものであると考える¹。学んだことが自分とつながり、自分を変えていくものになったとき、はじめて私たちは学ぶことの意味や価値を実感する。

これまで本校研究においては、様々なアプローチから手立てを講じ「ものがたりの授業²」づくりを提案してきた。一方で、授業で扱った題材に対する「ものがたり³」に変容は見られるものの、それが学んだことの意味や価値の実感につながったか、学んだことの意味や価値が実感されている「語り」とはどのような「語り」なのか、については、さらなる研究が必要ではないかという課題があった。そのため、題材に対する「ものがたり」とは別に、「自己に引きつけた語り」として、下記のように定義し、前回大会より「ものがたりの授業」づくりの柱としている。

「自己に引きつけた語り」

「語る」行為の中でも、特に出来事（題材）と自己との関連を見つめ、時間軸の中でそれを筋立て、その出来事の自分にとっての意味づけや価値づけをする主体的な行為

2 研究の目的及び内容

本研究は、「ものがたり」を踏まえ、語り合い、探究する学びの過程を通して「自己に引きつけた語り」を生み出すことができるカリキュラム開発と教師の手立てを追究することを目的としている。

右図は、研究構想図である。語り合い、探究する学びの経験が、子どもたちを少しずつ「自立した学習者」の木に成長させていく。共通学習Ⅰ・Ⅱ、共創型探究学習CAN・シャトル、特別の教科道徳および特別活動、それぞれのカリキュラムで育った木は、成長する中で互いにかみ合い、よりたくましい木になっていく。木は成長にともない、葉（教科の見方・考え方や探究スキル）をつけ、葉を通して生成された養分（学び）をもとに、さまざまな色の花（「語り」）を咲かせる。花はやがて実（「自己に引きつけた語り」）を結ぶ。みのった実には、その実にしかない味や形があるように、その個にしかない学びの意味や価値の実感が生まれる。このような営みを繰り返す中で、大木として育った木は、厳しい自然環境の中でも自らの力でたくさんの多様な実をつけていく。



【図1：研究構想図】

今期の「ものがたりの授業」づくりでは、次の2点に重点を置いて実践研究を進めている。

- (1) 単元における「授業者のねがい」の設定
- (2) 「自己に引きつけた語り」を生み出すための単元構成

¹ 林竹二（1990）は次のように述べている。「学ぶということは、覚えこむこととは全くちがうことだ。（中略）一片の知識が学習の成果であるならば、それは何も学ばないでしまったことではないか。学んだことの証しは、ただ一つで、何かがかわることである」

² 「ものがたり」の考え方を取り入れた授業で、他者との語り合いの中で、学んだことを過去の経験と関係づけ、筋立てが変わり、学ぶことの意味や価値を実感していく授業

³ ナラティブ・アプローチの考え方を取り入れ、語られた「物語」と、「物語る」行為の両方を包含する概念

(1) 単元における「授業者のねがい」の設定

授業者が、「その教科や本単元（題材）を学ぶ意義は何か」「本単元（題材）での学びを通して学習者自身をどのように変容させたいのか」といった問いに対する具体的なイメージが語れないと、「自己に引きつけた語り」を生み出す「ものがたりの授業」は構想できないと考える⁴。

そこで、本校では、「授業者のねがい」を以下のように定義し、「ものがたりの授業」を構想する上での基盤とした。さらに、授業者が考えた単元学習後の「振り返り」例の中に、「自己に引きつけた語り」例を明示することで、より授業づくりの方向性が明確となり、生徒が学ぶことの意味や価値を実感することのできる授業の指針になると考えた。

「授業者のねがい」
授業を通して生徒に期待する成長や変容

(2) 「自己に引きつけた語り」を生み出すための単元構成

「自己に引きつけた語り」を生み出すためには、生徒主体の学びにしていくことが重要である。しかし、いくら生徒任せに主体的な学びを促したとしても、「授業者のねがい」を踏まえた「自己に引きつけた語り」を生み出す方向に授業が展開されるかどうかは、定かではない。そのため、単元のどこで生徒の問いが生まれる場面を生み出すのか、また、他者と語り合う場面を単元のどの場面に組み込むのかなど、授業者が、「自己に引きつけた語り」を生み出すための、意図した「しかけ」⁵を講じた単元構成を計画することが必要となってくるのである⁶。

今期、「自己に引きつけた語り」を生み出すための授業者の「しかけ」として重視しているのは、主として次の2点である。

- i) 問いを生徒のものにするしかけ
- ii) 他者と語り合うためのしかけ

◆第2学年 数学科「面積の変わる？不思議なパズル」



【図2：「ものがたりの授業」構想図 例】

◆第2学年 数学科「面積の変わる？不思議なパズル」



【図3：単元構成 例】

⁴ 鹿毛 (2019) は次のように述べている。「教師が抱くねがいは、多くの場合、自覚的ではないが、授業の構想、展開、省察のすべてに影響を与える (中略) 教師のねがいは、授業を実践する上で中核的な位置を占める要素である。(中略) 教師に自分なりの『ねがい』がなければ、授業の構想は頓挫するに違いない」

⁵ 鹿毛 (2019) は、授業における「しかけ」について、以下のように述べている。「授業を担当する教師が、授業デザインを通して授業開始前までに準備した、すべての学習者の主体的で能動的な学び (外顯的/内面的) をサポートするために用いられるツール (物理的/非物理的) とそれ (ら) が機能する場 (環境) によって構成されるダイナミックなシステム」

⁶ 単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと【中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説総則編 p23】

《国語科》

言語による認識の力をつけ、豊かな言語文化を育む国語教室の創造

－ 読むことを通して読みの方略を獲得する国語科授業の在り方 －

田村 恭子 木村 香織

本校国語科では、「知覚化－意味化－相対化」をキーワードに、生徒が言葉の価値を実感できる授業をめざし、研究、実践を行ってきた。前回研究では、〈教材内容〉を深めながら、〈教科内容〉と〈教育内容〉を豊かに関連づけ、統合していく単元構成と、それに必要な教師のかかわりについて実践、検証した。

今期は、「読みの指導」を中心に、読みの方略を獲得したり他者と語り合ったりする中で、自分自身の「読み」の変容に気づき、読むことや言葉を捉え直し、学んだことを自らの「読み」に生かせる生徒の育成をめざし、次の3点を中心に研究、実践を行っていく。



【考えを語り合う様子】

(1) 〈読みを生きる体験〉と〈読みを自覚する体験〉の充実

〈読みを生きる体験〉＝自分の解釈と〈読みを自覚する体験〉＝読みの方略の獲得や他者との語り合いで得られた新たな読み、の双方が実感できる授業をめざす。

(2) 深い読みを生み出すための語り合う場の設定と工夫

読みの不十分さに気づかせる、学習課題や問いの設定、語り合える場の工夫などを検証する。

(3) 題材と自己の変容に気づく振り返りの工夫

自分の読みの変容に気づかせる思考ツールの活用や視点の設定などを検証する。

《社会科》

これからの社会のあり方を自ら考える民主社会の形成者の育成をめざした社会科学習のあり方

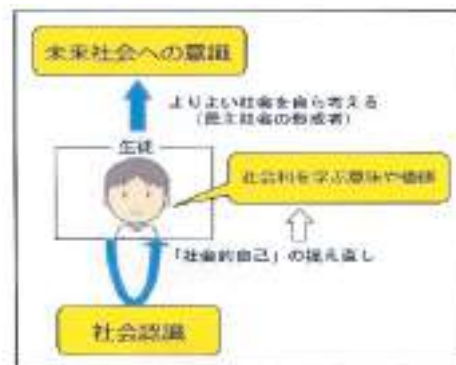
－ 「社会観」を語り合うことを通して「今・ここ」を相対化し「社会的自己」を捉え直す －

大西 正芳 藤本 大貴

民主社会の形成者の育成という社会科の目標に到達するためには、「今、私が生きている現代とは、どのような時代か」、「今、私が住んでいる地域には、どのような特徴があるか」、「今、私が生きている社会には、どのような制度が形作られているか」、つまり、「今・ここ」を捉えられないと、今後の民主社会を形成していくことはもとより、その方向性を構想することすら困難だろう。このような、『今・ここ』の社会に生きる私を「社会的自己」と定義する。さまざまな社会的事象の学びによって獲得される社会認識を鏡として「今・ここ」を相対化することで、それまで漠然としていた「社会的自己」の捉え直しにつながると思った。

また、今期の研究では、語り合うことを重視している。語り合うことの意義として、次の二点を考えている。一つ目は、語り合うことは生徒の主体的な社会認識の構築につながるという点である。二つ目は、語り合うことで生徒の持つ社会に対する価値観、言い換えれば「社会観」が表出しやすいということである。生徒にとって「社会観」の異なる他者と語り合う姿勢こそ、これからの民主社会の形成者に求められる資質・能力だと考えている。

以上のように考えて、研究主題を設定し、次の3点を研究内容として、研究を進めている。



【研究構想図】

(1) 「今・ここ」の自己につながる普遍的なテーマを設定し「社会的自己」を捉え直す単元構成

(2) 「社会観」を語り合う場の設定と工夫

(3) 「社会的自己」の捉え直しを「ものがたり」で語り直す工夫

《数学科》

数学で語ることの意味や価値を実感できる生徒の育成

－ 数学的活動を意識した授業から生まれる「ものがたり」を通して －

吉田 真人 渡辺 宏司 逸見 翔大

これまでの研究実践から、数学を学ぶことの意味や価値を実感するためには、他者と語り合い、学び合うことで新たな疑問や気づきが生まれること、また、「振り返り」や「語り直し」を通して、授業前後で題材(単元)に対する「ものがたり」の変容が見られることが必要であると分かった。今期は、「理解した」とか、「将来役に立つ」といった誰にでも見られるような語りにとどまらず、単元全体の学びが、「自分にとって」どんな意味や価値があったのかについて実感した「自己に引きつけた語り」を生み出したいと考えた。そのために、語り合い、探究する学びの過程で、数学を根拠に、論理的に語ること(数学で語ること)の意味や価値に気づかせたい。数学で語ることの意味や価値については、「普遍性があること」や、「解決が困難な問題に出会ったとき、数学を根拠にすることでその問題を解決できること」、「数学で学んだことをもとに、批判的に思考できること」などであると考えた。数学科での「ものがたりの授業」を実践して、数学で語ることの意味や価値を実感できる生徒を育成することを目標とし、次の3点を研究の柱として、研究を行っていくこととした。



【課題解決に向けての対話場面】

- (1) 生徒の探究する学びを促す単元構成の工夫
- (2) 批判的思考を促す場面の設定
- (3) 自己の変容を促す振り返りの工夫

《理科》

進んで自然とかかわり、見通しをもって探究できる生徒の育成

－ 科学する共同体の中であつむがれる「ものがたり」を通して －

山下 慎平 島根 雅史

本校理科における自立した学習者とは、「進んで自然とかかわり、探究する生徒」であると考え。このような生徒を育成するため、「自然の真理や摂理の追究」と「意味や価値の実感」を大切にして研究を行ってきた。これまでの研究により、生徒の思考を踏まえた単元構成や問い、対話を促す教師の手立て、「ものがたり」をつむぐための振り返りの工夫などが有効であることがわかっている。前回大会では、生徒自らが問いを見だし、探究する中で、自己と自然とのかかわりを新たな視点で捉えることのできる生徒の育成をめざし、研究を進めてきた。それらは一定の効果はあったものの、見通しをもって探究を進められていない生徒や、学んだことの意味や価値の実感を伴っていない生徒の姿も見られた。そこで、今期は、これまでの研究を引き継ぎつつ、次の3点を研究の柱として研究を進めていく。



【コケを観察している様子】

- (1) 自己に引きつけた学びを生むための単元構成の工夫
- (2) 仮説を立てる力を育成するための教師の手立て
- (3) 自己の自然観の変容に気づく振り返りの工夫

《音楽科》

音や音楽の意味を見出し、音楽とのかかわりを深める学習のあり方

— 音楽観の捉え直しや変容からつむがれる「ものがたり」を通して —

大田 菜美

本校音楽科は、これまで、音楽のよさや美しさを味わうことのできる学習のあり方について研究を進めてきた。その中で、音楽を形づくっている要素を支えとして思いや意図を伝え合い、音楽そのものに対するよさや美しさについて語ることに成果が得られた。

今期は、これまでの研究を継承しつつ、生涯にわたって音楽のよさや美しさを味わうことができる生徒を育成するために、生徒が音や音楽がもつ意味を見出し、音楽とのかかわりを深めることができる学習をめざして

いる。音や音楽の意味を見出し、音楽とのかかわりを深める学習を行うためには、授業者がどのような要素で音や音楽の意味を見出すのかを考へることが大切である。その上で、題材構成や問いの工夫を行い、自己の音楽観の変容を意識させていかなければならないと考へ、以下の3点を柱として、研究を進めていく。



【題材について語り合う様子】

- (1) 音や音楽の意味を見出すための題材構成の工夫
- (2) 鳴り響く音や音楽を吟味するための問いの工夫
- (3) 自己の音楽観の変容を意識させるための振り返りの工夫

《美術科》

創造活動の価値を見出す美術の学び

— 創造活動を通して「美」を探究し、自分にとっての「美」を探究する生徒の育成 —

渡邊 洋往

これまでの研究実践で表現、鑑賞両方の活動を「創造活動」とし、創造活動の喜びを見出すことができる生徒の育成を目指してきた。前回大会（2020）では、「鑑賞と表現の一体化」「新たな見方・感じ方を生み出す」「自ら美を探し求める視点を養う」を研究のキーワードとして研究を進めた。

今期はこれまでの研究を引き継ぎつつ、作品をもとに対話し、問いを見出し、学びを深める探究と、自ら美やその価値を探究する生徒の育成を目指した実践を通して、生徒が創造活動の価値を見出す手立てについて研究を行う。



【作品をもとに仲間と対話する場面】

特に、生徒のもつ「美」の認識の変容、表現と鑑賞が一体となった創造活動に着目している。表現と鑑賞が一体となった創造活動を行い、他者と感じ方を交流することで、テーマに対する美の捉えの変容をねらう。それらの経験を中学美術科の学びにおいて重ねていくことで、自分にとっての「美」を探究する生徒の姿の実現を目指し、次の3点を柱として研究を行なっている。

- (1) 作品をもとに対話する場の設定
- (2) 作品から問いを見出し、活動を通して深める単元構成の工夫
- (3) 自ら美を探し求める姿勢を養う美術環境の整備

《保健体育科》

健康やスポーツの価値を実感する保健体育学習のあり方
— 探究を通して生まれる「ものがたり」を通して —

石川 敦子 徳永 貴仁

本校保健体育科はこれまでに、豊かなスポーツライフの実現につながるための異学年合同学習や運動の苦手な子に焦点を当てた体育学習の研究を行ってきた。

今期は、豊かなスポーツライフの実現につながるための前段階として「健康やスポーツの価値を実感する」必要があると考えた。スポーツを「する」面白さだけでなく、「見る、支える、知る等」、それぞれの面白さがあり、その面白さに浸った時にスポーツの重要性や価値を感じることができると考えられる。また、その大前提として、「健康」が来るのではないか。「健康」はすべての活動の基盤となり、重要であることは分かっているが、その存在が当たり前となり、それを意識して生活している生徒は多くはないと考えられる。これらのことを踏まえ、保健と体育の両面からのアプローチが必要であると考えた。「健康やスポーツの価値を実感する」ための手立てとして、探究を通して生まれる「ものがたりの授業」を構想し、その実践の中で今期は以下の3点を柱として、研究を行っていく。



【ユニバーサルホッケーを通して
かかわり合う様子】

- (1) 学びを日常化へとつなぐ保健と体育を関連させた教材の開発
- (2) 自己に引きつけた語りを生むための単元構成の工夫
- (3) 自己の健康・スポーツ観の変容につながる振り返りの工夫

《技術・家庭科》

持続可能な社会を構築する実践力を育む技術・家庭科教育

— 生活を語り合い、問題解決を実践することで生まれる「ものがたり」を通して —
渡邊 広規 大西 昌代

本校技術・家庭科ではこれまで、学んだことを生かし、未来につながる生活をよりよくしたり、自己の生き方を考えたりする生活実践力を育むことをめざし研究を進めてきた。

今期は、よりよい生活とは何か視野を広げて考え、私たち一人一人の行動が持続可能な社会の構築につながっていることに気付かせ、自ら行動を起こす力を身に付けさせたいと考えた。生徒は、生活の中の当たり前を見つめ直し、そこから問題を見いだして解決策を考えていく。その中で、自己の生き方を語るだけでなく、持続可能な社会の構築に向けて自らアクションを起こすように変容しているかを見取っていきたい。そのために、「持続可能な社会を構築する実践力」を①社会の一員としての自覚をもち、消費が持つ社会的・環境的な影響力を理解する力、②環境問題や社会貢献等の社会的問題に関心をもち、批判的に考える力、③自分の生活が持続可能な社会の構築につながっていることを自覚しながら、生活をよりよくしたり、自己の生き方を考えたりする力、と定義し、以下の3点を手立てとして研究を行っていく。



【題材について語り合う様子】

- (1) 生徒の当たりの概念を捉え、より主体的な実践力へとつながる題材構成
- (2) 持続可能な社会の担い手として、語り合い、探究するための題材や場の工夫
- (3) 「自己に引きつけた語り」につながる振り返りや実践レポートの工夫

《外国語科》

コミュニケーションの喜び・感動を味わう英語授業の創造 — 「探究的な学び」から生まれる「ものがたり」を通して —

眞鍋 容子 黒田 健太

これまで英語科では、コミュニケーションへの意欲を高める英語授業の創造をめざして研究を進めてきた。学習前の生徒の考えを把握した上でコミュニケーションの場を設定したり、ことばの奥深さや多様性を実感させたりすることで、コミュニケーションへの意欲が高まると考え、実践を重ねた。生徒の振り返りを分析すると、日本と他国、日本語と英語の違いを知り、英語を学ぶ必要性や異文化理解の大切さを実感している記述は多く見られたものの、実利的な価値の実感に留まるものが多く見られた。それらの気づきや学びがコミュニケーションへの意欲向上に直結するとは言い難い。



【課題解決に向けたやりとりの場面】

そこで今期は、「探究的な学び」を柱に加えて、研究を行う。コミュニケーションの中で、生徒が既習の文法や単語を用いても「伝えたいことが伝わらない」というような困難な状況に直面することで、探究的な学びが始まると考える。その局面を乗り越え、異なる言語を話す相手と気持ちを伝え合う喜びや感動を味わった時、生徒は切実感だけでなく、英語でのコミュニケーションそのものに価値を見出すことができるのではないだろうか。生徒が過去・現在・未来に沿ってその学びを筋立て、英語を学ぶ意味や価値を実感する「ものがたり」を紡ぐことが、コミュニケーションへの意欲を高めるために有効であると考え。今期は、次の3点を柱として、研究を進める。

- (1) 「探究的な学び」につながる単元構成の工夫
- (2) 即興で話す力を育む教師の支援の在り方
- (3) 英語でのコミュニケーションに対する新たな「ものがたり」が生まれる語り直しの工夫

《学校保健》

人間性豊かで心身ともにたくましい子供の育成をめざして

— 「他者と関わる力」を育む養護教諭の関わり～自己肯定感を高めるために～ —

日本 亜矢

学校保健では、これまでソーシャルスキルトレーニングを取り入れた実践を積み上げてきた。今年度も、他者に自分の気持ちや考えを伝えることが苦手とする生徒や人間関係を維持することの難しい生徒に着目して「他者との関わる力」を育成するために、ソーシャルスキルトレーニングを行い、ソーシャルスキルの向上と自己肯定感の高まりについて検証する。



【ソーシャルスキルトレーニングの様子】

また、虐待やいじめ、不登校、ヤングケアラー等のリスクの高い生徒の早期発見ができるように、生徒の実態把握のためのチェックリストを作成し、個別の支援につなげていく。スクリーニングとして活用することにより、客観的な見立てとして、支援の必要な生徒への確実な支援に繋がる体制づくりを構築していく。

- (1) 「他者と関わる力」「自己有用感・自己肯定感（自尊感情）」を育むソーシャルスキルトレーニング（SST）の構成と工夫
- (2) 生徒の状況把握のための、チェックリストの作成

共創型探究学習シャトル

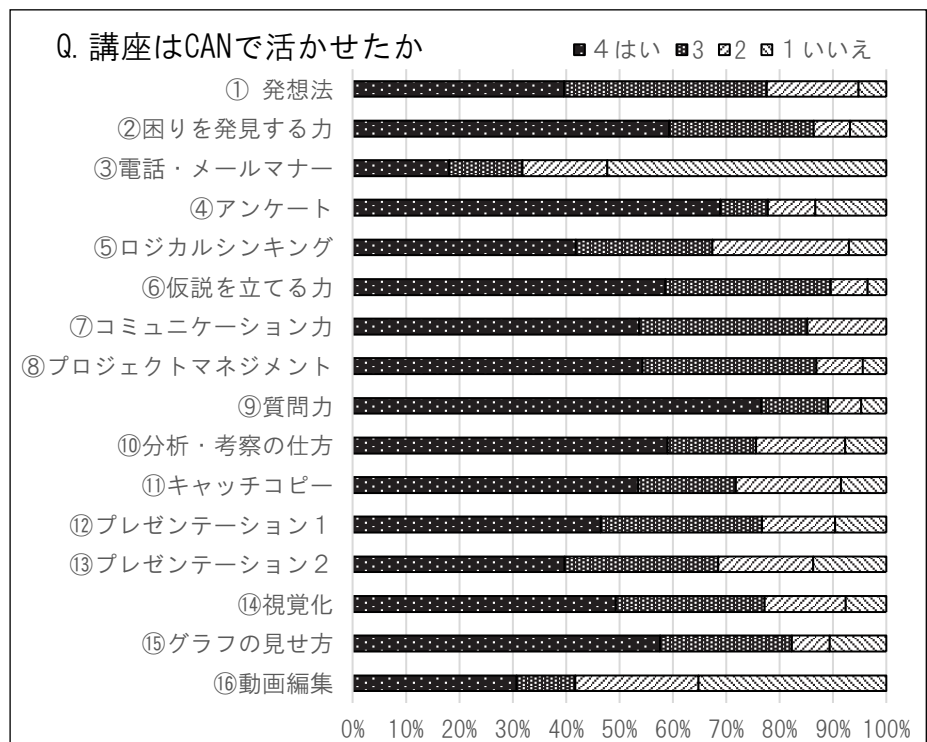
共創型探究型学習シャトル（以下、シャトル）のねらいは、各教科の学習や共創型探究学習CAN（以下、CAN）においてその探究スキルを活用することにある。これまで、講座内容が生徒の実態に合っているのか、CANの探究で活用されているのかといった課題が挙げられたため、今期はシャトルの講座内容と全体の枠組みの見直しを図り、下記のように前期8講座、後期8講座の16講座を実施した。生徒は、前期、後期それぞれ2講座ずつ選択して受講する形をとっている。

| | 2021 講座名 | 講座内容 |
|-------------------|---------------|--|
| 前期 2021年 1月 | ①発想法 | ブレインストーミング、KJ法、など、発想方法スキルの習得 |
| | ②困りを発見する力 | ・自分の生活の中で「困り」に着目し、課題を立てる ・身の回り（身近な人、地域）の「困り」に着目し、課題を立てる |
| | ③電話・メールマナー | 外部の方とスムーズに連携するために、電話のしかた、メールの書き方を学習する |
| | ④アンケート | 研究に必要なデータを収集するために実際にアンケート調査（質問紙作成など）を実施する→特に質問項目の立て方に重点を置く |
| | ⑤ロジカルシンキング | ただ考えるのではなく、思考ツールを実際に使いながら、考える「方法」を身につける |
| | ⑥仮説を立てる力 | 仮説を立てる力の育成 |
| | ⑦コミュニケーション力 | クラスターで探究が円滑に行われるコミュニケーションスキルの習得 |
| | ⑧プロジェクトマネジメント | 仕事、メンバー、方法を工夫し、時間を効率的に使う方法 |
| 後期 2021年 6月 | ⑨質問力 | 発表方式での質問する力の育成 |
| | ⑩分析・考察の仕方 | 実験や調査から得られたデータの間、関係があるのかないのか、相関関係を探る技能の習得 |
| | ⑪キャッチコピー | キャッチコピー ～人を惹きつけるテーマ～ |
| | ⑫プレゼンテーション1 | 発表方式でのプレゼン力～PREP法～ |
| | ⑬プレゼンテーション2 | プレゼンテーションソフトの効果的な使い方や技能の習得 |
| | ⑭視覚化 | 情報を分かりやすく伝えるために、絵やグラフなどで視覚化する技術の習得 |
| | ⑮グラフの見せ方 | データの処理 ～excelの使い方～ |
| | ⑯動画編集 | GIGA スクール環境でのタブレットを使った動画編集 |

【図4 共創型探究学習シャトル2021講座】

CANの探究終了後のアンケートによると、シャトル講座がCANで活かせたと肯定的に答えた生徒の割合が7割を超えた講座は、12講座であった。一方で、「電話・メールマナー」や「動画編集」等、探究内容によっては活用する場面がなく、学んだことが活かされなかった講座もあった。

シャトル2022講座に向けてCANの探究に役立つように、講座内容や講座開設時期について検討していきたい。



【図5 生徒アンケートの結果】

共創型探究学習CAN

1 令和2年1月～令和3年11月（CAN2021）の活動時期と概要

今年度のCANでは、生徒のさらなる探究活動の充実に向け、「探究課題設定期間の拡張」「他の視点を取り入れた探究活動」の2点を重点項目とした。活動時期と概要は下のとおりである。コロナ禍により探究活動が制限される中でもZoomなどのICT機器を用いて外部と連携することができた。また、生徒の探究がより深いものとなるよう探究深化シートとToDoリストを活用した。

【令和3年度 活動時期と概要】

| 共創型探究学習シャトル・CAN | | | | | | | | | |
|-----------------|----------------|------------------------|---|--------|--|--------|-------|--|--|
| 時期 | 冬休み・1月・2月 | 3月 | 4・5・6月 | | 7月・8月・9月 | | | 10月・11月 | |
| 人数 | 1人CAN | 2人CAN | 3～4人CAN | CANの日Ⅰ | CANの日Ⅱ | CANの日Ⅲ | プレ発表会 | 文化祭 | |
| 内容 | 個人で探究テーマを設定する。 | 2人で意見を出し合い探究テーマを深化させる。 | 探究の方向性・方法等について専門家からアドバイスをもらったり、予備調査を行ったりする。 | | 調べた方法で調査や実験など探究活動に取り組む。CANの日Ⅰ・Ⅱを活用し、外部の専門家を訪問して意見をもらう。 | | | 探究成果をまとめ、プレ発表会や文化祭等で発表する。探究の成果を最終論文集にまとめる。 | |

(1) 探究課題設定期間の拡張

昨年度までは、探究テーマを設定する時間が短く、探究の見通しが立っていないまま、クラスター編成をする場面がいくつか見られた。そこで、まず時間的な確保を行うために、探究テーマ設定の時間を4時間から9時間に増加させた。これにより、生徒は自己の課題設定シートをもとに、何を探究課題にするかをじっくりと考えることができた。



【一人CANで探究課題を考えている様子】

(2) 他の視点を取り入れた探究活動

年間約60時間のCANにおいて、生徒たちだけで探究を進めていくのは難しく、途中で行き詰ることが多い。そこで、新たな視点からの意見をもらうことで、探究の方向性を見出せるのではないかと考えている。今年度は、外部専門家・保護者・高校生（県立坂出高等学校教育創造コース）と連携し、探究に対する質問やアドバイスを行ってもらうことで、探究活動の活性化を図った。なお、高校生や大学生には、予め生徒と関わる視点を与え、意見の交流が単なる説明会にならないよう留意している。

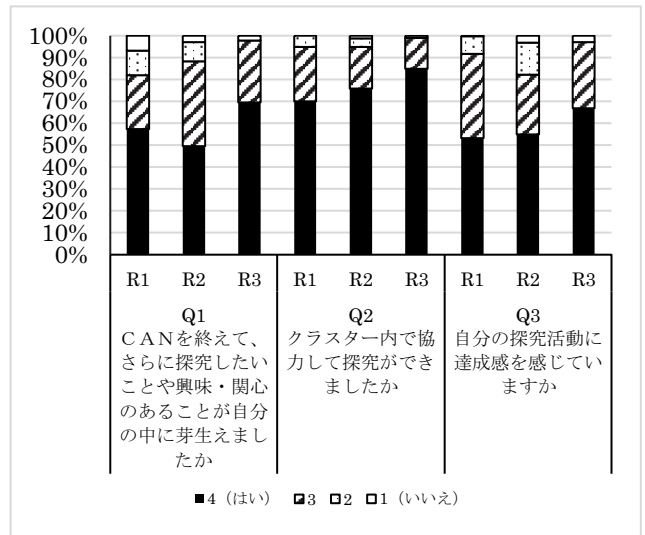
【坂高校生と中学生のやりとりの一例】

坂高校生：探究テーマについて教えてください。
 中学生：「なぜ、地球温暖化を止めることは難しいのか」です。
 坂高校生：どうして、そのテーマにしようと思ったの？
 中学生：世の中では地球温暖化が問題になっています。そして、その原因は二酸化炭素だと知りました。実際の社会でも、この問題の解決に向けて取り組んでいますが、状況は良いとは言えません。僕たちは、新たな方法でこの二酸化炭素の量を減らして、地球温暖化を止めたいと思っています。
 坂高校生：すごいねえ。君たちのゴールは何？
 中学生：僕たちのゴールは「植物が太陽光よりも活発に光合成を行う方法を見つける」ことです。
 坂高校生：地球温暖化と光合成はどんな関係があるの？
 中学生：僕たちは「二酸化炭素を出すのを抑える」ことよりも、「植物が吸収する」ことに目を付けました。つまり、より多くの植物が二酸化炭素を吸収すれば、地球上の二酸化炭素が減ります。
 坂高校生：どうすれば、より多くの植物が二酸化炭素を吸収するの？
 中学生：仮説は「太陽光よりも光の強さが強ければ、より活発に光合成を行うのではないか」です。
 坂高校生：光の強さって、どうやって調べるの？
 中学生：光の量はルクスという単位をもとに、計測器で調べたいと思っています。
 坂高校生：じゃあ、光合成をどのくらい行っているかはどうやって調べるの？
 中学生：今まで調べた結果、トウモロコシの葉が活発に光合成を行うことが分かりました。僕たちはトウモロコシの葉にエタノールを使って葉緑体の数を比較して光合成の量を検証しています。
 坂高校生：自分たちのしていることが地球を救うってワクワクするね！この探究に私たち高校生もできることってないかな？
 中学生：…そこまで考えていませんでした。今後は「誰にでもできる（＝多くの人が取り組める）」という視点も取り入れて探究を進めていきたいと思っています。

2 CAN2021の成果と課題

本年度の取組の効果について調査するために、探究のまとめの時期（11月）に生徒へ右図のようなアンケートを行った。

Q1の結果より、意欲や興味・関心に関する質問では、肯定的に答えた生徒の割合が年々増加しており、総合学習という授業の枠だけでなく、日常生活の中でも探究する態度が身についた生徒が増加していると考えられる。Q2の結果では、99%の生徒が生徒間の人間関係について、肯定的に捉えている。これは、クラスターの形成方法を異学年になるように設定し、それぞれの学年に役割をもたせて探究活動を行った結果が大きく影響していると考えられる。また、アンケートには「下級生がいることで、しっかりと探究の方向を示していかねばいけないと思いました」「先輩方のアイデアのおかげで、いろいろな実験方法を考えることができました」という記述があり、異学年で活動を行うことのよさを、生徒は感じているのではないかと考える。Q3の結果から、探究活動に達成感を感じている生徒の割合は、約97%であった。これは、高校生や専門家との交流の場面を設けたり、生徒間で質問することを義務付ける場面を設定したりすることで、物事を多面的にみる力が培われ、自分の探究を深めることにつながり、その結果自身の探究に対して意味や価値を感じるようになり、達成感が高まったのではないかと考える。



【図6 CANアンケート（生徒用）】

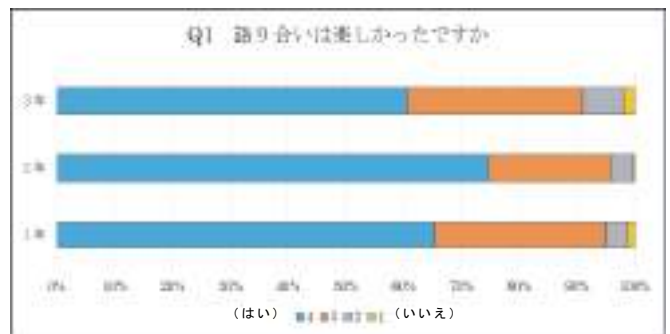
3 CAN2022に向けて

生徒の探究活動をより深いものにするための、次期CANの重点事項は、以下の通りである。

- ① シャトル学習と連携し、発表や表現、問う力を向上させるための取組
 - ② 生徒の主体性を意識した探究課題の設定
 - ③ 教科の学習とのつながりを意識した取組
- これらの重点項目を中心に改善を行い、生徒に探究することの喜びを実感させたい。

語り合いの時間

「語り合いの時間」とは、探究する集団の土壌づくりを目的として、答えのない問い（「勉強は何のためにするのか」など）に対し、参加者全員でじっくりと考え、語り、聞き合う時間である。令和元年度より取り組みを始め、実践を重ねてきた。アンケート結果（右図）から、生徒は「語り合いの時間」を楽しんでいる。一方、答えのない問いに対して、自分の考えに自信がもてず、積極的に語るができなかったり、一般論を持ち出し、正しいこと（＝答え）として相手を論破したりする姿も見られ、課題となっていた。そこで本年度は、以下のような取り組みを行った。



【図7 語り合いアンケート（生徒用）】

〈ねらい〉あらゆる出来事や問題を自分ごととして捉え、自ら考え、語れる生徒の育成

※ 本来、あらゆる出来事や問題には教科で学んだことや社会的に解決が必要な事項などがあるが、ここでは身近な問題についての意味

- ① 語り合う人数の変更。各クラス35名を4グループ（各8名～9名）に分ける。
- ② 振り返りの記入時間（10分）を必ず確保する。「語り合いの時間」掲示板で情報共有する。
- ③ 教師のファシリテート力の向上。（「そんな体験ある？」「自分なら？」など）



特別活動・学校行事

プロジェクトを中心とした生徒主体の学校行事の運営

本校では、学園運動会、送別芸能祭をはじめとするさまざまな学校行事が実施されている。その行事の多くは、生徒の立候補によって組織されたプロジェクトのメンバーによって企画・運営されている。各プロジェクトの生徒たちは、それぞれの学校行事を思い出に残る素晴らしいものにするために、自分たちで課題を見つけ、語り合い、改善していく。教師は、そのような生徒たちをサポートする立場に徹し、助言することはあっても、最終的には自分たちで考え決定させていく。

昨年度以降、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から多くの学校行事が中止・縮小を余儀なくされた。例えば運動会は昨年度から中学校のみでの半日開催となった。感染拡大のリスクを最小限にするため、学年をまたいで男女別で行っていたマスケームを、各学年単位で行うなど、内容の大幅な変更もあった。しかしながら、生徒たちは自ら考え、コロナ禍でも工夫した運動会を作り上げた。学年団ごとのマスケームになったことにより、それまで3年生のマスケームプロジェクトに教えてもらっていた1・2年生が教える立場になった。それにより、例年より早い段階でリーダーとして活躍する生徒が増えた。



【互いにダンスを教えあう様子】



【学年団でダンスを教えるプロジェクト】

教育研究発表会のご案内（第1次案内）

この度、下記の日程で、令和4年度教育研究発表会を開催する運びとなりました。つきましては、是非ご参会いただき、ご指導・ご助言を賜りたくご案内申し上げます。

- 1 テーマ 「わたし」が変わる「ものがたり」の学び
—語り合い、探究する中で、「自己に引きつけた語り」を生み出すカリキュラムの提案—
- 2 日時 令和4年6月10日（金） 8:50～16:35
- 3 内容 ○ 全体提案
○ 共創型探究学習CAN提案 ○ 共創型探究学習CAN生徒発表
○ 講話 上智大学総合人間科学部教育学科教授 奈須 正裕 先生
○ 公開授業（各教科） ○ 教科、学校保健提案・教科研究協議会
○ シンポジウム・講演 慶應義塾大学教職課程センター教授 鹿毛 雅治 先生

編集委員

渡辺 宏司 大西 正芳 島根 雅史
吉田 真人 大西 昌代 木村 香織
逸見 翔大 藤本 大貴 大田 菜美

令和4年2月16日

編集 香川大学教育学部附属坂出中学校
〒762-0037 坂出市青葉町1番7号
TEL/0877-46-2695 FAX/0877-46-4428
E-mail fuzoku-sakachu@kagawa-u.ac.jp